研究ノート

文化テクストからみる世代間における日系カナダ人のエスニシティに関する一考察
ーJoy KogawaのObasanを通してー

大石　文朗

A Study on Ethnicity of Japanese-Canadians among Generations in a Cultural Text, Joy Kogawa's *Obasan*

OISHI Fumio

要　旨

本稿では日系カナダ人に関する多くの文化テクストの内、ジョイ・コガワの『オバサン』を考察対象とする。物語には日系一世のアヤおばさん、日系二世のエミリーおばさんという、二人のおばさんが登場し、日系三世である主人公ナオミに多大な影響を与えて行く。この二人のおばさんは「静」と「動」のように全く対照的な性格として描かれており、原作のタイトルに『オバサン』と付けられているのは、日系カナダ人のエスニシティが世代間において複雑であることが象徴されたものであろう。このように日系カナダ人の情緒的で繊細な感情表現の記述に富んだ『オバサン』における英会話に着目し、原文の発話内容を分析することによって、日系カナダ人の各世代のエスニシティの特徴の検討を通して、当時の社会や文化的背景を理解するための一助とすることが本稿の目的である。

キーワード

日系カナダ人　　カナダの文化と社会事情　　異文化理解　　英会話表現

目　次

Ⅰ．はじめに
　1．本研究の背景
　2．本考察の方法と目的

Ⅱ．物語『オバサン』の概略

Ⅲ．『オバサン』における発話内容に対する分析

Ⅳ．おわりに
　　分析に対する考察のまとめ

注

文献

Ⅰ. はじめに

1. 本研究の背景

カナダでは1970年代以降、戦後補償を巡る日系カナダ人のリドレス運動[注1]が活発になった。これは、当時の社会情勢が強く影響したもので、その要因として、第二次世界大戦後の国際連合を中心とした弱者に対する人権保護への動きが強く作用していよう[注2]。そのような国際社会の後押しもあり、1971年にカナダは多文化主義宣言[注3]を行い、多様な「出自」・「エスニシティ」・「文化的な価値観」などが平等に尊重される社会を目指すこととなった。しかし皮肉にもこのことはいかにカナダ政府がこれまで平等を欠く施策を行ってきたのかを際立たせ注目させるきっかけになったともいえよう。日系カナダ人は、それまで政府より受けてきた戦中・戦後の不当な扱いについて「忘れることにより過去の清算を図る」[注4]ことから一転して、自身のエスニシティに対する自尊心が刺激されることとなった。特に、1977年の日系移民100年祭[注5]をきっかけにして、日系カナダ人が一つにまとまりリドレス運動へと発展して行った。しかしこの運動は同時に日系カナダ人が受けた不正義に対して証明し、世論に訴える必要に迫られたことでもあった。このことにより、日系カナダ人に関する多数の歴史書や小説などの文化テクストが1970年代以降出版されることとなった。特に、カナダのリドレス運動に多大な影響を与えた文化テクストの著者として、ケン・アダチ（Ken Adachi）、ジョイ・コガワ（Joy Kogawa）、アン・スナハラ（Ann Sunahara）が挙げられよう。アダチは*The Enemy That Never was: A History of the Japanese Canadians*, 1976において、歴史的な事実関係に基づいて論理的に日系カナダ人が受けた不当な扱いを論じた。コガワは『*Obasan*, 1981以降（オバサン）と表記する』において、強制収容所生活や戦後の散在政策[注6]による日系カナダ人の苦悩を小説として表した。スナハラは*The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians during the Second World War*, 1981において、日系カナダ人に対して行われた第二次世界大戦下の人種差別を政策的な観点より論じた。これらの著書は、リドレス運動において日系カナダ人の理解に多大な貢献をもたらしたばかりでなく、現在においても、日系カナダ人の研究には重要な文化テクストであり、実際、正規の授業にて多くのカナダの大学が教科書もしくは副読本として採用している[注7]。

2. 本考察の方法と目的

本稿では日系カナダ人に関する多くの文化テクストの内、ジョイ・コガワの『オバサン』を考察対象とする。この『オバサン』を考察対象とするのは、カナダ処女作品賞、カナダ文学賞、全米図書賞など、他にも5つの賞を受賞しており、当時の世論に与えた影響が大きかったと思われるからである。さらに、内容はフィクションであるがコガワの体験を基に書かれており、フィクション化することによって、個人の特異な経験というよりはむしろ、当時の日系カナダ人の共通の思いを代弁する形になっているからである。物語には日系一世のアヤおばさん、日系二世のエミリーおばさんという、二人のおばさんが登場し、日系三世である主人公ナオミに多大な影響を与えて行く。この二人のおばさんは「静」と「動」のように全く対照的な性格として描かれており、原作のタイトルに『オバサン』と付けられているのは、日系カナダ人のエスニシティが世代間において複雑であることが象徴されたものであろう。このように日系カナダ人の情緒的で繊細な感情表現の記述に富んだ『オバサン』における会話に着目し、先ずは物語の概略を紹介し、その後、原文の発話内容（日本語訳を併記）を分析することによって、日系カナダ人の各世代のエスニシティの特徴の検討を通して、当時の社会や文化的背景を理解するための一助とすることが本稿の目的である。

Ⅱ. 物語『オバサン』の概略[注8]

物語は1972年に小学校の教師をしている36才の主人公ナオミが、お世話になったイサムおじさんが亡くなったのをきっかけに、自らの半生を振り返ることから始まっている。戦前ナオミはバンクーバーでも特に環境の良い住宅街において、両親と兄スティーブンの四人家族で何不自由なく暮らしていた。父方の祖父（ナカネのおじいちゃん）は腕のいい船大工で、母方の祖父（カトウのおじいちゃん）は医者であった。また、ナカネのおばあちゃん、カトウのおばあちゃんという両祖父母、父の兄であるイサムおじさんとその連れ添いのアヤおばさん、母の妹であるエミリーおばさんという親戚に囲まれ、なに不自由なく幸せな日々をナオミは過ごしていた。

母とカトウのおばあちゃんは、1941年9月に当時5才だったナオミや家族を残し、ナオミからすると曾祖母の看病のため日本へ旅発った。その数ヵ月後の12月に日本とカナダが交戦状態になり、日系カナ

ダ人すべてが敵性外国人とみなされ、それまでの幸せな暮らしが一変してしまう。また、未だ日本にいた母とカトウのおばあちゃんとナオミは音信不通になってしまう。その後バンクーバーのヘイスティングス・パーク強制収容所[注9]を経て、ナカネのおじいちゃんとおばあちゃんはニューデンバー強制収容所[注10]へ、カトウのおじいちゃんとエミリーおばさんはトロントへ、アヤおばさんとスティーブとナオミはスローカン強制収容所[注11]へ、父とイサムおじさんは強制労働へいくことが政府から強要されてそれらに従った。その後、ナカネのおじいちゃんとおばあちゃんはニューデンバーの病院[注12]で亡くなり、強制労働から帰って来てスローカン強制収容所で久しぶりに一緒にナオミ達と暮らしていた父は肺結核を患い、ニューデンバーの病院へ移されそこで亡くなってしまう。

1945年に終戦を迎えたが、カナダ政府は日系カナダ人が西海岸に戻ることを禁止し、ロッキー山脈より東に行くか、日本に帰るかの選択を迫った[注13]。イサムおじさん、アヤおばさん、スティーブン、ナオミ達はアルバータ州、グラントンへ移り住んだ。イサムおじさんはシュガービート労働者として働き、ナオミ達も収穫期など忙しい時期には学校を休んで手伝いをし、多感な成長期を過ごしていった。物語はそこでナオミの回想から一転し、イサムおじさんが亡くなった1972年の現実に戻る。イサムおじさんの葬式やアヤおばさんの今後の身の振り方を家族が考える中、エミリーおばさんは、ナオミが36才という立派な大人に成長したことを踏まえて、ナオミの母とカトウのおばあちゃんの消息についてずっと隠し続けてきたことを告げる決意をした。それはカトウのおばあちゃんから来た二通の手紙であった。それによると1945年の8月に親戚の出産を手伝うために、ナオミの母と自分は長崎にいてそこで原爆に被爆したということが綴られていた。自分はなんとか助かったが、ナオミの母の行方が分からなくなり、数日間探し続けやっと見つけ出した時には、鼻はそげ落ち、片方の頬がほとんどなくなり、髪の毛はすべてなく、無数の傷口にはウジ虫がわいている状態であった。医者からは当初見放されたが、奇跡的に一命を取り留め、その後は顔の傷を隠すため布のマスクを付けて暮らし、子どもたち（スティーブンとナオミ）だけには知らせないでとカトウのおばあちゃんに言い続けていることが書かれていた。当時、エミリーおばさんがナオミの母に手紙を出しても返事はなく、その後ナオミが高校生の時にナオミの母はすでに他界し墓が東京にあるのを知っただけであった。被爆の後遺症に苦しんでいたカトウのおばあちゃんとナオミの母がいつ亡くなったのか誰も正確には分からなかった。

このような悲惨な最期を遂げた母とカトウのおばあちゃんにナオミは思いをはせながら、先月イサムおじさんと一緒に来て、風で草の影がさざ波となっている草原を坐りながら眺め、いつもおじさんが口癖のように言っていた「海のよう・・・・・」という情景を思い出す場面で物語は終わっている。

Ⅲ.『オバサン』における発話内容に対する分析

日系カナダ人の強制収容は、国家が主導して強要したもので、それに従わない者は刑務所に送られるという半ば脅迫的な措置であったことを当時の政府高官であったイアン・マッケンジーの発言を通してエミリーおばさんは次のように言及している。

> All Nisei are liable to imprisonment if we refuse to volunteer to leave. At least that is the likeliest interpretation of Ian Mackenzie's “Volunteer or else” statement[1].
> （訳：自発的に立ち退かない二世はすべて刑務所行きになりそうです。少なくともそれが、イアン・マッケンジーの「自発的に立ち退くか、さもなくば・・・・・」という発言のもっとも現実的な解釈でしょう。）

このような国家の圧力によって、自発的という姑息な形で行われた人権侵害ならびに犯罪行為に関して、他の場面でもKogawa（以降コガワと表記する）は多数描いている。例えば、カナダ連邦警察（Royal Canadian Mounted Police　以降、日本語表記のみとする）に対して日系カナダ人がラジオを差し出すのは、こちらからわたさなければ、「We had to give them up or suffer the humiliation of having them taken forcibly by the RCMP.（訳：強制的に取り上げられるという屈辱を味わうだけだから。）」[2]、また、「･･･the men were forced to “volunteer” to go to the work camp.（訳：男たちが『ボランティア』と称して強制的に労働キャンプにつれていかれてしまった。）」[3]と表現されている。そして、国家の横暴的な圧力に関して、「They can search our homes without warrant.

（訳：彼ら（カナダ連邦警察）は令状を持たずに家宅捜索ができる。）」[4]、「There's … fear of RCMP, …（訳：カナダ連邦警察への恐怖が人びとの心に充満している。）」[5]と、犯罪者以下の扱いで強権的に従わせる実態があったことが訴えられている。このような扱いに対して、取って付けたような法的解釈によってあたかも合法的な行為であるかのように国が不正義な行いをすることに対する怒りと悲しみが、「It isn't as if we Nisei were aliens … technically or not.（訳：法的にしろなんにしろ、私たち二世が外国人であるわけないのに。）」[6]という表現に集約されている。

さらに、開戦によってなぜ自分たちが強制収容されなければいけないのか、という根本的な疑問が日系カナダ人の中にはあった。自らが犯した罪でもないのに、先に強制収容ありきで後付けしたような政府の説明は不信感を募らせるだけで何の説得力も持たなかった。特に日系一世にとって、「… was too old then to understand political expediency, race riots, the yellow peril.（訳：かなりの高齢だったために、政治上の便宜主義とか、人種暴動とか、黄禍などと言われても理解できなかった。）」[7]と描かれている。日系一世だけでなく、「… nobody can keep up with all the things that are happening.（訳：まわりで何が起こっているのか、知っている人などひとりもいません。）」[8]とあるように、何が起こっているのか分からない不安にかられていた。このまわりで起こっていることが見えない状況に対して、「… mostly there's a helpless panic. Not the hysterical kind, but the kind that churns round and round going nowhere.（訳：行くあてもないどうどうめぐりのパニック状態。）」[9]もしくは「We're like a bunch of rabbits being chased by hounds.（訳：猟犬に追われるうさぎの集団。）」[10]と表現されている。

また、家畜同然に扱われた強制収容所の様子は、次の引用文でエミリーおばさんがその状況を嘆いているように、プライバシーはなく不衛生きわまりない環境であったことが描かれている。

> This morning Dad got out of bed and went to the Pool bunkhouse for men (the former Women's Building). He was nauseated by the smell, the clouds of dust, the pitiful attempts at privacy. The livestock Building (where the women and kids are) is worse. Plus manure smells. The straw ticks are damp and mouldy[11].
>
> （訳：けさ父さんは、起きるとすぐプールの男性収容所（元女性パビリオン）に行ってきました。悪臭ともうもうたる埃、それに嘆かわしいプライバシーの侵害に、まったく吐き気を催すほどだったそうです。家畜小屋（女性と子どもたちが収容されている）はもっとひどい状態でした。家畜の排泄物の臭いがあたりにまだ充満しており、藁を詰めたふとんは腐ってじとじとしています。）

さらに、このように衛生面に問題があったばかりでなく、水道、風呂、暖房、食料のどれをとっても人が生活していける環境ではなく、様々な病気が誘発される劣悪な状態であったことが次の引用文から窺い知れる。

> … the confinees in the Hastings Park Pool came down with terrible stomach pains. Ptomaine, I gather. … the people are treated worse than livestock … No plumbing of any kind. They can't take a bath. They don't even take their clothes off. Two weeks now. Lord! Can you imagine a better breeding ground for typhus? They're cold (Vancouver has a fuel shortage), they're undernourished, they're unwashed. One of the men who came out to buy food said it was pitiful the way the kids scramble for food and the slow ones go empty[12].
>
> （訳：ヘースティングス・パークのプールに監禁されている人たちがひどい腹痛を起こして倒れました。食中毒でしょう。… 中略 …みんな家畜以下の扱いです。… 中略 …水道設備もなく、風呂にも入れず、服を脱ぐことすらできません。こんな状態のままもう二週間もたちました。ああ！発疹チブスにとってこれ以上の好条件はあるでしょうか？みんな寒さにふるえ（バンクーバーは燃料不足なのです）、栄養不良になり、不潔きわまりない状態でいます。食料を買いに出てきた男の人の話では、子どもたちは食べ物を奪い合い、ぐずぐずしている子はいつも食料にありつけないのだそうです。ほんとうにかわいそうだと彼は言っていました。）

このような強制収容所での生活を余儀なくされた日系カナダ人が、どのような思いであったのかは、次の引用文におけるエミリーおばさんが収容所で偶然ナカネのおばあちゃんと再会した場面に象徴されている。

> I found Grandma Nakane there sitting like a little troll in all that crowd, with her chin on her chest. At first I couldn't believe it. She didn't recognize me. She just stared and stared. Then when I knelt down in front of her, she broke down and clung to me and cried and cried and said she'd rather have died than have come to such a place[13].
>
> （訳：ナカネのおばあちゃんを発見したんです。おおぜいの人たちのなかに、おばあちゃんが小人みたいに胸にあごをのせて坐っているのを見つけたのです。私は自分の眼を疑いました。おばあちゃんも最初、私のことが分からなかったらしく、ただ、ただ、じっとみつめていました。私がおばあちゃんの前にひざまずくと、とたんにおばあちゃんはわっと泣きだして、私にしがみついてきました。そして、泣いて泣いて泣きじゃくって‥‥‥こんなところにくるくらいなら、死んだほうがよかったと言いました。）

この「死んだほうがよかった」と思うくらいの劣悪な状況は、自らの精神を支えるために徐々に感情を押し殺して、感覚を麻痺させていったと次の引用文で描かれている。

> There's no sadness when friends of long standing disappear overnight … either to Camp or somewhere in the Interior. No farewells … no promise at all of future meetings or correspondence … or anything. We just disperse. It's as if we never existed. We're hit so many ways at one time that if I wasn't past feeling I think I would crumble[14].
>
> （訳：長年の友人が収容所、あるいは国内の他の土地へいくため一夜にしていなくなっても、悲しいという感情がどうにも湧いてこないのです。別れの挨拶もなく、ふたたび会おうという約束もなく、連絡すらできるかどうかわかりません。ただ散り散りばらばらになっていくだけです。まるで私たちは、初めから存在していなかったみたいです。いろいろなことがあまりにもいっぺんに起こってきたので、感情を殺して通り抜けないことには、自分がぼろぼろになってしまうということかもしれません。）

この感情を押し殺し、現状を直視しないことに対してエミリーおばさんは、「We go where they send us. Nothing affects me much just now except rather detachedly.（訳：私たちは彼ら（政府）に行けと命ぜられるところへ行くしかないのです。もう何が起こってもよそごとのようにしか感じられなくなりました。）」[15]、「No witnesses will speak up against him anymore.（訳：不正を目撃しても、もう誰ひとり文句も言わなくなってしまいました。）」[16]という諦めの境地に達したことが描かれている。そして、結局エミリーおばさんが辿り着いた「思い」は、次の引用文が示すように、現実として生き延びていくために妥協するということであったと表現されている。

> … chasing this elusive hope or that, worrying, figuring, going bats with indecision, with one door after another closing then opening again … we finally realize the only thing to do is give in [17] …
>
> （訳：とらえどころのない希望を追い、先のことを心配し、憶測し、なかなか決心がつかないまま時間ばかりがたっていきます。次から次に、ドアが閉じたかと思うとまた開き、やっと最後に、唯一の方法は妥協することだと気づいたのです。）

その後も第二次強制移動が政府から強要され、この移動に関して「Conditions worse than evacuation. Repatriation and dispersal policies the cruellest cut of all.（訳：諸条件は（第一次強制）移動時より悪化。本国送還と散在政策は残酷きわまりない結果をもたらした。）」[18]とエミリーおばさんは語り、結局日系カナダ人には何ら援助の手がさしのべられることはなかったという思いが描かれている。

物語の中で、カナダにおける当時の人種差別に

関して、コガワは皮肉たっぷりと痛烈に描いている。それは、真珠湾攻撃という直接攻撃を受けたアメリカよりもカナダの人種差別の方がひどく、人権という概念すら存在しなかったと、次のナオミとエミリーおばさんの会話において表現されている。

Emily: “I hate to admit it, but for all we hear about the States, Canada's capacity for racism seems even worse.”
Naomi: “Worse?”
Emily: “The American Japanese were interned as we were in Canada, and sent off to concentration camps, but their property wasn't liquidated as ours was. And look how quickly the communities reestablished themselves in Los Angeles and San Francisco. We weren't allowed to return to the West Coast like that. We've never recovered from the dispersal policy. But of course that was the government's whole idea … to make sure we'd never be visible again. Official racism was blatant in Canada. The Americans have a Bill of Rights, right? We don't.” [19]

（訳：エミリー：「認めたくはないけれど、聞くところによるとカナダの人種差別はアメリカよりひどかったらしいわ」
ナオミ：「アメリカよりもひどかった？」
エミリー：「そう、アメリカの日系人も私たちと同じように拘束され、強制収容所に入れられはしたけれど、カナダのように財産までは処分されなかったそうよ。それにね、ロサンジェルスやサンフランシスコなどではずいぶん早くから日系人のコミュニティが再建されていた。でも私たちには、あんなふうに西海岸に帰ってくることは許されなかったのよ。… 中略 …カナダでは国家による人種差別が堂々と行われていた。アメリカには人権宣言があるけど、わかる？カナダにはないのよ」）

また、エミリーおばさんはそのような日系カナダ人に対する人種差別は根が深く、「We were rioted against back in 1907, for heavens sakes!（訳：排斥運動は1907年からもう始まっていた。）」[20] と言い、絶えず偏見にさらされてきたことを主張している。その根拠としてドイツ人を引き合いにだし、ドイツと日本の両方を相手に戦争していたにもかかわらず、政府はカナダ生まれの日系カナダ人の財産を奪ったにもかかわらず、ドイツ生まれのドイツ人にはそのようなひどい仕打ちをしなかったことを挙げている[21]。さらに、「I guess it's because we look different. What it boils down to is an undemocratic racial antagonism …（訳：きっと日系人は外観の違いが大きいからでしょう。要するにこれは、非民主主義的な人種差別ではありませんか。）」[22] と訴えている。

さらに、日系カナダ人が露骨な人種差別の標的にされたのは、「How different the world is now! The whole continent is in shock about the Pearl Harbor bombing.（訳：世の中がすっかり変わってしまった！パールハーバーの襲撃で、大陸じゅうがショックを受けています。）」[23]「War breeds utter insanity.（訳：戦争はとんでもない狂気をひき起こす。）」[24] とエミリーおばさんを通して描かれているように、戦争が諸悪の根源であるというコガワの主張である。そして、差別意識が刺激されるのは、身近に入ってくる情報によってであり、それら情報の真偽は問われず、無責任に受け入れられてしまうことへの憤りと怒りが様々な場面で表されている。例えば、スティーブンがクラスメートから、「All the Jap kids at school are going to be sent away and they're bad …（訳：ジャップの子は学校から全員追っぱらわれるのよ。悪い奴だから。）」[25] とあからさまに言われたり、日系人のことを何一つ知らない結社の議長が「… we were all spies and saboteurs, and that in 1931 there were 55,000 of us and that number has doubled in the last ten years.（訳：日系人はすべてスパイか破壊活動家だ、1931年には5万5千人だった日系人がこの10年間で二倍にふえている。）」[26] と生物学上明らかに理屈の合わないことが公然と言われ、それを信

じ込む人々がいることが描かれている。さらにエミリーおばさんは、新聞までもがあてにならないとその憤りを次のように言っている。

> … the newspapers are printing outright lies. There was a picture of a young Nisei boy with a metal lunch box and it said he was a spy with a radio transmitter[27].
>
> （訳：新聞もまっ赤な嘘をでっちあげはじめました。アルミの弁当箱を持った二世の男の子の写真を載せて、「彼は無線送信器を使ってスパイ行為をしている」と書くデタラメさ。）

そしてエミリーおばさんは、これらのように少しでも考えれば荒唐無稽なことだと分かることが、何の疑問も持たれず受け入れられるのは、多くの人にとって他人事であり、その無知と無関心が原因であると次のように訴えている。

> My butcher … But kind people like him are betrayed by the outright racists and opportunists like Alderman Wilson, God damn his soul. And there are others who, although they wouldn't persecute us, are ignorant and indifferent and believe we're being very well treated for the “class” of people we are[28].
>
> （訳：行きつけの肉屋さんたちでさえ、市会議員ウィルソンのようなあからさまな人種差別主義者、便宜主義者にころりとだまされてしまうのです。まったく、いやなやつです。また、私たちを虐待はしないまでも、無知、あるいは無関心から、私たちが「身分」不相応にいい扱いを受けていると信じこんでいる人たちもいます。）

これらのように差別は無知や無関心によって、無責任あるいは悪意のある情報を鵜呑みにしてしまうことから広がっていくということが描かれている。そして、カナダが掲げている民主主義という理念が本当の意味で実践され、差別が是正されるようになるには、結局は国民一人一人の意識にかかっているということが、次の引用文の中の「（カナダは）民主主義の国だったはずではありませんか？」のエミリーおばさんの言葉に込められていよう。

> Mind you, you can't compare this sort of thing to anything that happens in Germany. That country is openly totalitarian. But Canada is supposed to be a democracy[29].
>
> （訳：忘れてならないのは、ドイツで起こっていることとこれとを比較はできないということです。あの国はおおっぴらに全体主義を謳っている国。でも、カナダは違う。民主主義の国だったはずではありませんか？）

このように、日系カナダ人に対する不当な扱いは国家の基本理念である民主主義に対する裏切り行為であったという思いが表現されている。

作者コガワは小説のタイトルでもある『オバサン』、つまりアヤおばさんとエミリーおばさんという対照的な二人を通して、日系カナダ人のエスニシティの複雑さを表現している。アヤおばさんは、日本生まれで日本的な価値観の持ち主である典型的な日系一世を象徴している。他方、エミリーおばさんは、カナダ生まれで西洋的（カナダ的）価値観の持ち主である典型的な日系二世を象徴している。二人のおばさんの影響を受けて育った日系三世のナオミは、両方の価値観の狭間で揺れ動きながら成長する。

コガワは、ナオミを通して二人のおばさん、つまり一世と二世の違いを「石」と「音」という喩えを用いて次のように表現している。

> How different my two aunts are. One lives in sound, the other in stone. Obasan's language remains deeply underground but Aunt Emily, BA, MA, is a word warrior[30].
>
> （訳：私の二人のおばさんは、なぜこんなに違うのだろう。一方は音の世界に住み、一方は石の世界に住んでいる。アヤおばさんの言葉は地下深くに埋もれているが、文学士で文学修士のエミリーおばさんはまるで言葉の戦士のようだ。）

アヤおばさんを喩えている「石」とは、沈黙を表しそれは悲しみを意味している[31]。他方、エミリーおばさんの悲しみは「音」、つまり発言することによって相手に思いを伝えることである。そのようなエミリーおばさんのことを、日本生まれで一世のイサムおじさんは「“Nisei, not very Japanese-like”（訳：二世ってのは、ちっとも日本人らしくないから

な。）」[32]と言い、それに対してエミリーおばさんは、「“Why should we be?” “We're Canadian”（訳：なぜ？なぜ日本人らしくしなくちゃいけないの？私たちはカナダ人なのよ。）」[33]と言い返す場面がある。このように、エミリーおばさんの日系カナダ人のエスニシティは明確で、自分たちはカナダ人というものである。これは彼女の信念とも言うべきもので、強制移動に関しても「It isn't as if we Nisei were aliens … technically or not.（訳：法的にしろなんにしろ、私たち二世が外国人であるわけはないのに。）」[34]「Rumours are that we're going to be kept as prisoners and war hostages … but that's so ridiculous since we're Canadians.（訳：うわさでは、私たちは囚人か捕虜の扱いで収容されることになるというのです。そんなばかなことがあるでしょうか。私たちはみんなカナダ人なのに。）」[35]など、随所に彼女の主張が描かれている。

他方、次の引用文は成人したナオミがアヤおばさんのことについて語ったものであるが、それによるとアヤおばさんは、自らが築いた領域の住人であると表現されている。

> Obasan, however, does not come from this clamorous climate. She does not dance to the multi-cultural piper's tune or respond to the racist's slur. She remains in a silent territory, defined by her serving hands[36].
>
> （訳：でもアヤおばさんは、この騒々しい土地の生まれではない。多文化の笛の音に合わせて踊ることもなければ、人種差別主義者の中傷に憤ることもない。ただひたすら沈黙の領域にとどまったまま、人につくすことのみを役目と心得ている。）

このように、カナダ生まれの二世は自らをカナダ人と言い切ることができるが、日本生まれの一世は基本的な人格が形成される幼少期と青年期という重要な年頃を日本で過ごしているので、より複雑なエスニシティだといえよう。それは精神面と日常生活面の両方においてカナダ人とは顕著な差異があるが、その中でも、特に言葉に関して日系一世は不自由を強いられていた。例えば、1946年の第二次強制移動時に、日系一世の中には英語ができないため内容を知らずに日本への送還同意書にサインをしたのではないかという懸念を、エミリーおばさんは次のように述べている。

> “Who knows how or why they decided to leave? Some Issei without their children around couldn't read and simply signed because they were urged to.” [37]
>
> （訳：この人たちがどんなふうに、なぜカナダを去ることに決めたのか、いったい誰にわかるのよ。子どもたちが近くにいない一世のなかには、書類に何が書いてあるかもわからず、せきたてられてしかたなくサインをしてしまった人だっていたはずよ。）

さらに言葉だけでなく精神面でも日系一世は日本的な傾向が強く、ガマンすることが美徳であるという価値観を持っていたことが描かれている。アヤおばさんは「コドモ・ノ・タメ・ガマン」が口癖であり、サムライの刀が熱い火で何度も鍛えられて強くなっていくのになぞらえて、強くて立派な人間になるには困難を何度もくぐり抜ける必要があるとナオミに言い聞かせた[38]。このように言葉や価値観は日本という出自国の影響が強いにもかかわらず、しかしながらカナダの地に骨を埋める覚悟をしている日系一世の帰属意識の複雑さを表すのに、コガワは「沈黙の領域の住人」という表現を使っている。

また、三世であるナオミやスティーブンは、二世ほど気負わずごく自然にカナダ人だと思っていることが、次の引用文における戦争終結時のスティーブンの行動で描かれている。

> Yesterday Stephen came running back from town shouting that the war was over and we had won. “We won, we won, we won!” he cried, running through the yard with both hands raised and his fingers in the V-for-Victory sign. … After Stephen calmed down, he climbed the woodshed and hopped to the roof of the house, carrying a hammer and nails and a flagpole with a well-worn Union Jack[39].
>
> （訳：きのう、スティーブンが、戦争が終わった、ぼくたちは勝ったんだ、と叫びながら町から帰ってきた。「勝ったぞ、勝ったぞ、勝ったぞ！」と彼は叫びながら、両手をあげて指で勝利のVの字をつくって庭じゅうを走りまわった。…　中略　…やがて興奮がおさまると、ス

ティーブンは金槌と釘と旗竿をかかえて薪小屋によじ登り、母屋の屋根にとび移ってそこにユニオン・ジャックを掲げたのだった。）

スティーブンが「ぼくたちは勝ったんだ」と叫びながらユニオン・ジャックを掲げるのは、何のためらいも気負いもなく当然のごとく自分はカナダ人と思っている三世のエスニシティを、象徴的にコガワは表現している。

このような世代によるエスニシティ観の違いは、他の場面でも表現されている。例えば、戦後補償に対する考え方を言い合う場面では、ここでもアヤおばさんとエミリーおばさんは全く対照的に描かれている。エミリーおばさんは戦時中の書類に目を通し、「日系人」という語が出る度にそれを消して「カナダ市民」と書き直し、「“What this country did to us, it did to itself”（訳：国家が私たちにしたことは、国民そのものに対してしたことなのよ。）」[40]と言っている。それを聞いたナオミは「For her, the injustice done to us in the past was still a live issue.（訳：彼女（エミリーおばさん）にとって、日系人に対して行われた不正行為はけっして過去のものではない。）」[41]と感じ取る。このようにエミリーおばさんは、過去から目をそらさないで自分たちの思いを世間に知らしめることこそが、再び同じようなことが起きないようにするための抑止策だと次のように訴えている。

> “You are your history. If you cut any of it off you're an amputee. Don't deny the past. Remember everything. If you're bitter, be bitter. Cry it out! Scream! Denial is gangrene.” [42]
>
> （訳：あなた自身があなたの歴史なのだから。もし一部でも無くしたら、あなたはもうまともじゃないのよ。過去を否定しないこと。全部憶えておくこと。つらかったら、つらいと思わなくっちゃだめ。大声をあげてごらん！叫んでごらん！過去を否定することこそ腐敗の根源なのよ。）

他方、アヤおばさんは、「“Arigatai. Gratitude only.”（訳：アリガタイ。ありがたいと思うだけだよ。）」[43]と言って、過去にあった政府による日系カナダ人に対する不正義は忘れた方がいいとナオミにも言い聞かせている。二世は自らが生まれた国に対する権利意識が強いが、それとは対照的に、一世は日本的なガマンという美徳もさることながら、生まれた国でもないのに居させていただいているという何か負い目の様なものを抱いていることが、この表現の中にみてとれるのではなかろうか。

さらに、日系三世であるナオミの戦後補償に対する考え方は複雑である。育ての親のアヤおばさんの影響を強く受けて、忘れてしまった方がいい記憶というものがあり、過去に起きたある事件についての疑問は、現在に対して不必要な混乱の原因でしかないのではとナオミは捉えている[44]。そして、エミリーおばさんに「“Life is so short, the past so long. Shouldn't we turn the page and move on?”（訳：人生は短く、過去は長いわ。いいかげん、ページをめくってつぎへすすんだら？）」[45]とあきれて言ってしまうが、一方でナオミの内面では次の引用文にみられるように、自分の感情を押し殺して、絶えず周りに気を遣いガマンするアヤおばさんにみる日本的なエスニシティに対して違和感を感じ、嫌悪感すら持ち始めている。

> I want to break loose from the heavy identity, the evidence of rejection, the unexpressed passion, the misunderstood politeness. I am tired of living [46] ･･･
>
> （訳：重くのしかかる自分というものから解放されたい。わけもなく拒絶され、情熱を無表情のなかに押しこめ、礼儀正しさまでもが誤解されてしまう。こんな状態はもうたくさんだ。）

ここでは、日系一世には忘れて押し殺すことができる過去かもしれないが、自らが生まれた国から社会的に排除されたことに対する割り切れない思いが、日本的なことに対する違和感や嫌悪感という一種の自己否定として広がり始め、それから「解放されたい」と願うほど日系三世の心を深く傷つけていることが表現されている。またこのことは、成人したスティーブンが「He is always uncomfortable when anything is “too Japanese”.（訳：あまりに日本的なことに出くわすといらいらしてくる。）」[47]という彼の言葉でも描かれている。そして、エミリーおばさんから「“We're gluing our tongues back on”（訳：私たち日系人が、もう一度ものを言えるようになったのよ。）」[48]と促されることによって、ナオミの日系三世としての内なるエスニシティが刺激され、アヤおばさんに象徴される日系一世のエスニシティ

とは相容れない部分があるということに目覚めていくのが、次の引用文の「私の渇きをいやしてはくれない」に込められていよう。

> “Kodomo no tame … for the sake of the children … gaman shi masho … let us endure.” The voices pour down like rain but in the middle of the downpour I still feel thirst[49].
> （訳：「コドモ　ノ　タメ … 子どものため … ガマン　シマショ … 我慢しましょ」その声は雨のように降りそそぐけれど、どんなに激しく降りそそいでも私の渇きをいやしてはくれない。）

さらにこの表現では、祖父母世代の一世と親世代の二世という両方の影響を受けて育った三世が、自らの世代のエスニック・アイデンティティに目覚めて構築していく様が描かれていよう。

Ⅳ. おわりに

分析に対する考察のまとめ

ホスト国においてマイノリティな集団である移民は、世代間における社会的同化の差異は避けられないものであろう。どのような社会や民族も一世は常に言葉や文化の違いに苦労しながら手探りで自らの居場所を築いていくことが強いられよう。そこには、マジョリティな集団による個人的な偏見に基づく不寛容な対応も多かれ少なかれ経験することになろう。しかし不幸にも戦争というものが日系カナダ人に対しては個人ではなく国家が法律を盾に社会的な排除に動いてしまった。このことに関して、コガワはエミリーおばさんを通して、日系カナダ人の強制収容は国家が主導して半ば脅迫的な措置で行われたものであり、取って付けたような法的解釈によってあたかも合法的で自発的という姑息な形で行われた人権侵害ならびに犯罪行為であったと断罪している。

このような国家ぐるみで日系人を排除する緊急事態の中で各々が将来をかけて判断を迫られるからこそ、世代間のエスニシティによる考えの違いが浮き彫りになるともいえよう。日系カナダ人のエスニシティに関しては、アヤおばさんとエミリーおばさんという対照的な二人を通して、日系一世を「石」、日系二世を「音」に喩えてその違いが表現されていた。カナダ生まれのエミリーおばさんに象徴される日系二世のエスニシティは明確で、自分たちはカナダ人というものであった。「私たち二世が外国人であるわけない」という表現に国が公然と不正義な行いをすることに対して怒りと悲しみを表していた。また、この様な不正義がまかり通るのは人種差別が根源であるとドイツ人に対する国の対応を引き合いにしてその理不尽さを訴えた。カナダという生まれた国の国民であるという認識であり、一国民としての権利意識を強く持ち合わせている。差別は無知や無関心からくるもので、民主主義が実践されるためには、過去から目をそらさないで日系カナダ人の思いを世間に訴える必要性を説いていた。

他方、日本生まれのアヤおばさんに象徴される日系一世のエスニシティはより複雑であった。二世であるエミリーおばさんを「音」に例えて、相手に伝えることである意味悲しみを乗り越えることが表現されているが、一世は「石」に例えられ、悲しみを沈黙で表現しており、ガマンすることが美徳である。これは、青年期までの人格形成期に重要な時期を日本で過ごしているため、言葉のみならず価値観においても日本という出自国の影響が強かったためである。自身がカナダ社会において異質な存在であることを自覚しながら、カナダの地に骨を埋める覚悟をしている日系一世の帰属意識に対して、コガワは「沈黙の領域の住人」という表現でその複雑さを表すと同時に、社会的に異質な存在である自らに対して何か負い目のようなものを抱いているように描いていた。

さらに、ナオミが象徴している日系三世は、二世ほど気負わずにごく自然にカナダ人だと思っているように表されていた。同じ三世であるスティーブンが「ぼくたちは勝ったんだ」と叫びながらユニオン・ジャックを掲げる表現がそれを象徴していよう。そして、祖父母世代の一世と親世代の二世という両方の影響を受けているため、二つの価値観の狭間でどちらかに揺れ動きつつも、日系三世としてのエスニック・アイデンティティに目覚め構築していく様が表現されていた。

注

注1 日系カナダ人の戦後補償を訴えるリドレス運動は、戦中・戦後のカナダ政府による不正義な扱いに対する反省と謝罪を求めたものである。特に、リドレス（Redress）という言葉に込められた思いは、単なる金銭的な補償だけではなく、日系カナダ人の名誉を回復させるという強い意思が示されたものである。マリカ・オマツ著、田中裕介・田中デアドリ訳『ほろ苦い勝利』（現代書館、1992年）が、日系カナダ人を中心とした戦後リドレス運動を詳しく取り上げている。また、日系米国人との戦中・戦後の扱われ方についても比較がなされている。

注2 坂本は自著（坂本義和『地球時代の国際政治』岩波書店、1992年）にて、第二次世界大戦後の国際社会を国際連合の活動の観点より三つの時期区分に基づき、「平和」「開発」「人権」という概念が座標軸になってきたと指摘している。第一期の「平和」は、1946年から1950年代終わり頃までとし、戦争の生々しい記憶に基づいた平和への意識が広く世界に共有されており、同時に冷戦という新しい戦争の始まりにより平和の維持が強い関心事であったことが特徴であるとした。また、第二期の「開発」は、1960年代で、非植民地化が促進され新たに独立した国の経済的な自立のための開発が大きな柱となった時期であるとした。そして、第三期の「人権」は、1970年代以降で、個人の人権と集団の権利である自決権をも含めた包括的な意味での人権が重んぜられるようになった時期とした。

注3 1971年に王立委員会によって多文化主義が政策として採用された。その後1988年には、多文化主義法が制定され、その条例の中には「出自を問わずあらゆる個人や集団が、カナダ社会のすべての生活領域の持続的発展と形式に際し、完全かつ平等に参画しうるよう奨励し、彼らの参加を阻むいかなる障害をも取り除くよう尽力すること。･･･法の下に平等の処遇と平等の保護を享受するものであることを保証すること。･･･カナダの公用語の地位を高めそれらの使用を促進する一方、英語およびフランス語以外の言語の使用を維持し強化すること」と謳われている。これについては、日本カナダ学会編『資料が語るカナダ』（有斐閣、2000年）に詳しく紹介されている。

注4 鹿毛は自著（鹿毛達雄『日系カナダ人の追放』明石書店、1998年）において、カナダの日系人にとっての戦争の記憶は、まさに忘却から始まったと指摘しており、第二次世界大戦中の強制移動・強制労働・強制収容・財産没収などの一連の不当な政府の扱いに対して、日系カナダ人は忘却の道を選択し沈黙を守ったと述べている。このことに対しては、日系一世または年長の二世は沈黙を守ることを美徳とし、逆境の中でも文句や不平を言わず懸命に働くことによって信用を獲得するという価値観であったと言及している。

注5 カナダへの最初の日本人移民者として認知されているのは、1877年にバンクーバーの集落に住み着いた長崎県出身の永野万蔵である。永野万蔵はカナダへ移民をするために日本を出国したのではなく、船員としてたまたまバンクーバー沖に停泊中に下船をし、そのままカナダに住み着いた。これについては、新保満『石をもて追わるるごとく』（お茶の水書房、1996年）に詳しく紹介されている。日系カナダ人は、永野万蔵が日本人移民者の原点とみなし、1977年に100年祭を実施した。

注6 1945年の8月に終戦を迎えるが、その後も日系カナダ人は強制収容前の太平洋岸にあった自宅へ帰ることは禁じられた。いわゆるカナダ政府の散在政策によって一部の日系人を除きブリティッシュ・コロンビア州から退去命令が出されたのであった。これにより、ロッキー山脈よりも以東に移動するか、日本へ追放されるか、どちらかの選択を迫られた。この散在政策による強制移動は、カナダ社会での日系カナダ人の孤立を自覚させ、日系社会における日系人同士の絆をも弱めていった。

注7 筆者が当時勤務していた大学はカナダのSelkirk Collegeと交流があり、現地の授業も視察した経験があるが、たまたま参観した文学の授業においてJoy Kogawaの*Obasan*がテキストとして用いられていた。

注8 筆者が当時勤務していた大学の図書館が発行するライブラリー情報にて、Joy Kogawaの*Obasan*を紹介した。その書物は、姉妹校提携をしていたカナダのSelkirk Collegeの教員が実際にカナダで使用しており、現地にて授業を参観した際にいただいたものである。

注9 一時的に収容された仮収容施設である。その後、内陸部の強制収容施設にそれぞれの家族が振り分けられて強制移動させられた。この仮収容施設はもとは家畜用の品評会の会場であり、地面には糞尿が混じり、大変不衛生な場所に簡易ベッドを置いただけの所であった。この不衛生な仮収容施設の環境により、特に日系カナダ人には肺結核を患う率が高かった事が指摘されている。

注10 1942年当時には、1,505名の日系カナダ人が強制収容された。5か所の施設からなるサテライト収容所でそれらはスローカン湖の北方に沿って点在し、総計350エーカーの広さであった。

注11 6か所あった強制収容所の内、一番多くの日系カナダ人が収容された。1942年当時には、4,814名が強制収容されていた。他の収容所として、Greenwood、New Denver、Sandon、Kaslo、Tashmeがあった。

注12 主に当時不治の病とされていた結核患者の日系カナダ人を受け入れるために1942年に設立された病院であった。戦後も結核患者や重い病気にかかった人々を治療し続けるために、ニューデンバーの強制収容施設だけは閉鎖されなかった。

注13 日本へ送還された日系カナダ人は3,965名であったが彼等にも悲劇が待ち受けていた。日本政府は彼等に対して日本国籍を認めない意向を示したのであった。敗戦で混乱した当時の日本社会で、多くの送還された日系カナダ人が帰属する国を失いホームレスになり、アメリカ赤十字の援助に頼らざるをえなくなり、その後消息が分からなくなった人たちも大勢いた。

文献

1) Kogawa, J., *Obasan*, Penguin Canada, p.93 (1983).
長岡沙里訳,『失われた祖国』中公文庫, p.168

(1998). 原書の原文と照合して内容を確認した後、訳文を用いた。以降の本書からの引用も同様である。

2) 同上, p.92, 訳書p.165.
3) 同上, p.93, 訳書p.166.
4) 同上, p.92, 訳書p.165.
5) 同上, p.101, 訳書p.179.
6) 同上, p.92, 訳書p.166.
7) 同上, p.17, 訳書p.37.
8) 同上, p.101, 訳書p.179.
9) 同上, p.101, 訳書p.180.
10) 同上, p.97, 訳書p.174.
11) 同上, p.104, 訳書p.184.
12) 同上, pp.96-97, 訳書p.173.
13) 同上, p.106, 訳書pp.188-189.
14) 同上, pp.94-95, 訳書pp.169-170.
15) 同上, p.94, 訳書p.169.
16) 同上, p.103, 訳書p.183.
17) 同上, p.114, 訳書p.202.
18) 同上, p.203, 訳書p.347.
19) 同上, p.35, 訳書p.67.
20) 同上, p.36, 訳書p.69.
21) 同上, p.40, 訳書p.76.内容を参照した。
22) 同上, p.88, 訳書p.160.
23) 同上, p.86, 訳書p.156.
24) 同上, p.90, 訳書p.162.
25) 同上, p.76, 訳書p.139.
26) 同上, p.89, 訳書p.160.
27) 同上, p.91, 訳書p.164.
28) 同上, p.94, 訳書p.168.
29) 同上, p.93, 訳書p.167.
30) 同上, p.33, 訳書p.64.
31) 同上, p.14, 訳書p.33.内容を参照した。
32) 同上, p.43, 訳書p.81.
33) 同上, p.43, 訳書p.81.
34) 同上, p.92, 訳書p.166.
35) 同上, pp.101-102, 訳書p.181.
36) 同上, p.248, 訳書p.421.
37) 同上, p.204, 訳書p.349.
38) 同上, pp.141-142, 訳書p.248.内容を参照した。
39) 同上, pp.183-184, 訳書p.316.
40) 同上, p.35, 訳書p.66.
41) 同上, p.35, 訳書p.68.
42) 同上, p.54, 訳書p.102.
43) 同上, p.44, 訳書p.84.
44) 同上, p.48, 訳書p.89.内容を参照した。
45) 同上, p.45, 訳書p.85.
46) 同上, p.201, 訳書p.343.
47) 同上, p.238, 訳書p.404.
48) 同上, p.38, 訳書p.72.
49) 同上, p.269, 訳書p.452.